# タカバン塚古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第335集

1993 福岡市教育委員会

## タカバン塚古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第335集



1993 福岡市教育委員会 福岡市南部にひかえる油山は都市化の進む中にあって、多くの自然と史跡が残された地域となっております。しかし、近年の人口増加に伴う都市開発は油山の山麓まで及んでいます。

福岡市教育委員会ではさまざまな開発によって失われていく文化財について事前の調査を行い、保存策に努めています。

本書は寺院建設にともなう埋蔵文化財の発掘調査報告書です。調査によってタカバン塚と呼ばれる古墳の全貌が明らかになりました。幾度かの攪乱により大きく破壊されていたものの、多数の副葬品などが残されており、被葬者がこの地域でも代表的な有力者であったことを教えてくれます。こうした成果は、本地域の歴史や文化を語る上で重要な手がかりとなるものと考えられます。

発掘調査から報告書作成に至るまで、地権者をはじめとする関係各位に多大な ご理解とご協力を賜りました。心から感謝を表する次第です。

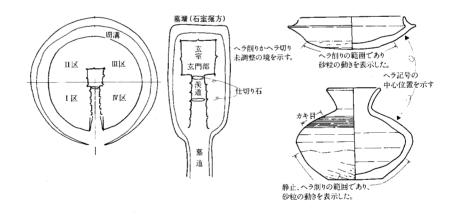
本書が文化財保護の理解を深める一助となり、併せて研究資料として活用いただければ幸いです。

平成5年1月

福岡市教育委員会
教育長 井口 雄哉

## 例言

- 1、本書は、宗教法人明性寺による寺院建設にともない、福岡市教育委員会が1991年 4 月30 日~同年 7 月 3 日まで発掘調査を実施したタカバン塚古墳の調査報告書である。
- 2、本書使用の遺構実測図は、吉留秀敏、屋山洋が作成し、浄書は吉留秀敏がおこなった。
- 3、本書使用の遺物実測図は吉留秀敏、井英明、甲斐田嘉子、宮代栄一が作成し、浄書は井 英明、宮代栄一、吉留秀敏がおこなった。
- 4、本書使用の写真は吉留秀敏が撮影した。
- 5、本書使用の方位は磁北である。本地域における真北との偏差は6°21´である。
- 6、本書の執筆は5-1, 3 を宮代栄一、5-2 を岡田文男がおこない、その他は吉留秀敏がおこなった。また、編集は吉留秀敏がおこなった。
- 7、本書で使用する古墳各部の名称、遺物の調整、記号の名称は下に概念図で示した。
- 8、本書に関わる図面、写真、遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管 される予定である。



遺跡調査番号	9107		遺跡略号		DGK-A		
調査地地籍	城南区大字	毎林字平原495-1	2, 523-1	分布	分布地図番号 75-B-11		-B-11
開発面積	1087.3m²	調査対象面積	820 m	2	調 査 面 積 82		820 m²
調査期間	1991年 5	1991年5月13日~1991年7月3日		事	前審查番号		2-2-310

## 本文目次

1,	調査に至る経過	
2,	調査の経過と組織・・・・・・・1	
	タカバン塚古墳の位置と環境	
4、	調査の記録	
1	) 墳丘5	
2	.) 内部主体	
3	) 墓道と閉塞施設1(	)
4	)遺物の出土状態	)
5	5) 出土遺物	2
	a,須恵器14	1
	b, 土師器····································	)
	c, 装身具····································	?
	d,石製品····································	2
	e, 土製品····································	2
	f , 鉄器···································	2
6	5) その他の遺物24	1
5、	出土鉄器の研究25	5
]	, タカバン塚古墳出土の帯状鉄製品について······25	5
2	2, 帯状鉄製品に銹着した布について30	)
3	3, タカバン塚古墳出土の馬具について3:	1
6、	まとめ	
挿	1図目次	
図:	L. 周辺地形図と遺跡の分布(1/60000)	j
図 2	2. 駄ノ原古墳群分布図 (1/8000)	t
	3. 周辺地形測量図 (1/600)	
図 4	4. 墳丘測量図(1/200)	j
図:	5. 墳丘土層断面図(1/100)	,
図 (	6. 地山整形図(1/200)	}
図 ′	7. 石室実測図(1/80)	}

図8.	閉塞関連遺構実測図(1/40)	10
⊠9.	墓道土層断面図 (1/40)	11
図10.	墳丘および墓道内遺物出土状況図(1/80・1/20)	13
図11.	出土須恵器 (1) (1/3·1/6)	15
	出土須恵器 (2) (1/3)	
図13.	出土須恵器 (3)(1/3)	17
	出土須恵器 (4) (1/3・1/6)	
	出土須恵器 (5) (1/6・1/8)	
	出土土師器 (1/3)	
	出土玉類 (1) (1/1·2/3) ······	
	出土玉類 (2) (1/1)	
	出土鉄器 (1/2)	
	出土石器 (1/1・1/2)	
	タカバン塚古墳出土靱金具実測図(1/2)	
	タカバン塚古噴出土靱金具復元図(1/2)	
図23.	タカバン塚古墳出土馬具実測図(2/3)	31
网片	<b>反目次</b>	
<b>14</b> 71		
図版 1	1. 布が漆で固着した部分(落射光:約11倍)	
	2. 布が重なった状態の断面 (透過光:50倍)	
	3. 糸の断面 (透過光: 125倍)	
	4. 繊維の断面(透過光:250倍)	
図版 2		
	2. タカバン塚古墳近景(南西から)	
図版 3	3. 1. 石室全景(南西から)	
	2. 石室墓壙(南から)	
	3. 墳丘土層断面(東から)	
	4. 閉塞関連遺構(北東から)	
	5. 遺物C群出土状態 (北から)	
図版		
図版:	5. 1. 出土遺物 須恵器、土師器	

図版 6. 1. 出土遺物 武器類他

## 1、調査に至る経過

福岡市南部に位置する油山山麓には多くの古墳、群集墳が分布していることが古くから知られていた。1970年代には九州大学、福岡大学の調査団や研究会により数カ所の群集墳の分布調査や一部の発掘調査が行われている。タカバン塚古墳は油山北麓西部に位置し、駄ノ原古墳群に隣接する古墳であり、1976年に福岡大学歴史研究部によって刊行された「福岡市駄ノ原・霧ヶ滝古墳群分布調査報告書」に記載された周知の遺跡であった。

1990年11月14日にタカバン塚古墳を含む福岡市城南区大字梅林字平原495番12,523番1に、宗教法人明性寺(以下「甲」とする)より寺院建設にともなう埋蔵文化財事前審査願いが提出された。これを受けた福岡市教育委員会埋蔵文化財課(以下「乙」とする)では、同年12月11日に試掘調査を実施した。試掘調査は古墳の遺存状態の確認を目的に行った。その結果、古墳の主体部は壊されていたが、周溝の遺存を確認した。この結果を受けて甲、乙両者は古墳の保存に関する協議を重ねた。しかし、古墳の保存は困難と判断し、発掘調査を実施し、記録にとどめることとした。1991年4月に甲、乙両者は発掘調査の委託契約を締結した。

## 2、調査の経過と組織

発掘調査は1991年4月30日から同年6月20日の予定で開始した。しかし、6月中旬からの梅雨入りで作業が進まず、調査期間を7月3日まで延長した。調査に際しては以下の体制を組織したが、相次ぐ緊急調査により十分なる体制がとれなかったが、関係各位の多大な協力によりその進行が無事進められたことを明示しておきたい。

調查委託者:宗教法人明性寺(代表役員 成澤政敏)

調查主体:福岡市教育委員会埋蔵文化財課第1係

教育長 井口雄哉、部長 花田兎一、課長 折尾 学、第1係長 飛高憲雄

調查庶務:中山昭則

試掘調査:瀧本正志、加藤良彦 調査担当:吉留秀敏 調査・整理補助:屋山洋、井英明

調査作業:上野龍夫、別府俊美、徳永静雄、大長正弘、岡崇、中村フミ子、藤野信子、

大穂栄子、大穂アサ子、石橋テル子、篠塚ひろ子、澄川アキョ

整理作業:尾崎君枝、甲斐田嘉子、木村良子、丸井節子、宮坂環

調査・整理協力:亀井明徳(専修大学教授)、本田光子(福岡市埋蔵文化財センター)、

宫代栄一(朝日新聞社)、岡田文男(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)

なお、発掘調査遂行にあたって明性寺住職成澤政敏氏をはじめ関係各位には多方面にわたるご協力を頂いた。記して感謝したい。

## 3、タカバン塚古墳の位置と環境<sub>(図1)</sub>

福岡平野と早良平野の間には北の背振山系から派生する油山(592m)山塊と低丘陵地帯が広がる。油山から北の博多湾に向かっては鴻巣山(101m)を最高所とする丘陵が広がり、油山北麓を水源とし北流する樋井川や金層川水系の浸食により、南北方向の細長い丘陵を形成する。

タカバン塚古墳はこうした丘陵の一つに所在する。この丘陵は樋井川の支流である七隈川の 上流部にあり、この支流域では比較的広い沖積地に突き出している。古墳は丘陵の中央部の尾 根線上に位置する。標高は約40mである。

さて、このタカバン塚古墳を中心とした樋井川上流域は、弥生時代後期以降に古墳をはじめとする埋葬遺構が集中的に築造されている。弥生時代後期から古墳時代前期には、干隈古墳、クエゾノ遺跡などの小規模の墳墓が設けられている。古墳時代中期になるとこの丘陵地帯は古墳、群集墳の形成が多くみられるようになる。その中にはクエゾノ遺跡にみられるように比較的大型の古墳を中心とした古墳群を形成するものと、梅林古墳のようにほぼ単独の小規模前方後円墳がある。同後期になると、この地域の古墳は爆発的に増加する。本古墳の周辺を見ても七隈、駄ノ原、大谷、霧ヶ滝、西油山、倉瀬戸、片江、鳥越などの古墳群が分布している。古墳の立地もこれ以前の丘陵地帯より山際に近く、山麓斜面や一部は山間部にも展開している。周辺における該期の古墳数は概数で300を越えている。これほどの集中は福岡市域でも少なく、月隈丘陵、観音山、金武・羽根戸、今宿・徳永とともに北部九州の大規模群集墳地帯の一つとして捉えられる。

タカバン塚古墳周辺では駄ノ原、大谷、七隈古墳群が調査されている(図 2)。駄ノ原古墳群はA~E群に分かれ、計54基が確認されている。A群はタカバン塚古墳のすぐ南側に分布し、墳径15mを越える群内では大きな規模の古墳を含んでいる。なおF・G群は他の古墳とは比高差で約50m離れた標高130~150mの山間部の急斜面に密集して分布する。1970年に小田富士雄、真野和夫氏によってA群の3基が調査され、終末期古墳として報告された。大谷古墳群はタカバン塚古墳、駄ノ原古墳群とは谷を隔てた東側の山麓斜面部にあり、計11基の古墳からなる。1971年に7基の調査が行われた。多量の鉄滓供献例などが確認された。七隈古墳群はタカバン塚古墳の北側の丘陵地帯に分布し8基からなる。1969年に大学施設建設にともない3基を福岡市教育委員会が調査した。古墳の多くは独立に近い丘陵項部を選地している。2基の古墳は墳径15~22mとこの地域では大型の墳丘をもっている。また出土遺物から6世紀中葉の築造が推定され、群集墳としては比較的初期の築造とみられた。なお、5号墳には弓金具の出土があった。

参考文献 緒方勉編「大谷古墳群 I 」福岡市教育委員会 1972 小田富士雄、真野和夫他『倉瀬戸古墳群』倉瀬戸古墳群調査団 1973 山崎純男編「大谷古墳群 II」福岡市教育委員会 1985 塩屋勝利「七隈古墳群の調査」『鳥越・七隈古墳群』福岡市教育委員会 1985

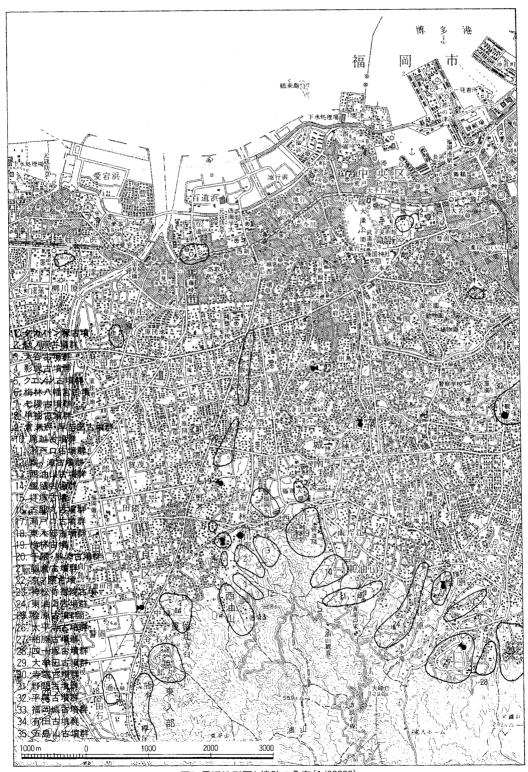


図1、周辺地形図と遺跡の分布(1/60000)

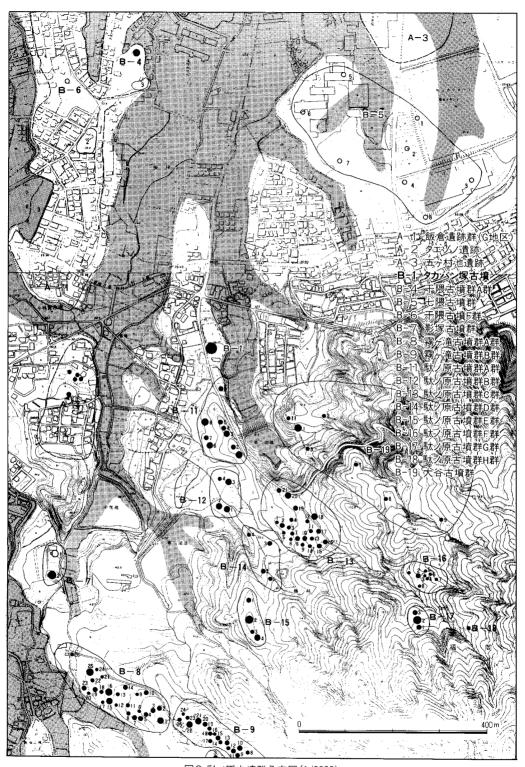


図2、駄ノ原古墳群分布図(1/8000)

## 4、調査の記録

#### 1.発掘調査の概要(図3)

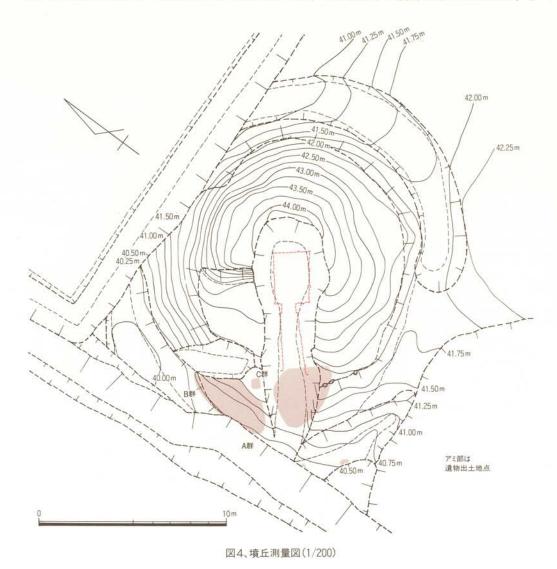
調査対象地は雑木林と墓地であった。調査の事前に墓地の改葬、樹木の伐採が行われた。調査開始の時点では敷地内に3カ所の高まりがあり、3基の古墳を推定した。しかし、全面的調査やトレンチ調査の結果、北西側の1カ所を除いて古墳でないことが判明した。この1カ所は旧来から「タカバン塚」と呼ばれており、事前の試掘調査で周溝が確認されていたものである。この古墳は中央部に石室石材を抜き取ったと見られる大きな穴があり、相当の攪乱が予測された。調査はまず攪乱部分を掘り上げ、石室主軸線を確定し、その後墓道部、墳丘部の断ち割り調査を行うこととした。

#### 1) 墳丘(図4、6)



図3、周辺地形測量図(1/600)

調査前の見かけ上墳丘は墳径約15m、高さ約2.5mであった。墳丘の北側は工場建設により、西側は道路によって削られている。また、墳丘の各所に土取りや樹木の抜根によると見られる窪地があり、保存状態は良くない。盛り土は旧地表に直接積まれている。旧地表は丘陵の傾斜に沿って、南から北に下がるために全体として北側が厚くなっている。盛り土は石室裏込めから連続して行われ、地山の花崗岩媒乱土と地表直下の粘土を互層状に数回の工程で積み上げている(図5)。周溝は墳丘南側で途切れているが、これは周辺の削平によるものと見られる。そのため全周を巡るか明かでない。断面は浅いU字形を呈する。旧地表面での規模は平均して幅4~5m、深さ約1mと推定される。墳丘の規模は周溝下場を墳端とすると、主軸方向で約19m、横約16mであり、主軸方向に長い卵形を呈する。また現存する墳高は約3.5mである。な



**-6-**

お、墳丘外表は攪乱が激しく本来の墳丘面は観察できないが、墳丘南側の標高42.5m付近、北側の41.5m付近に傾斜がやや緩やかになる部分がある。両者を繋ぐ墓道両側部分ではその延長上に数個の石列や須恵器の埋置(C群)がある。したがって本古墳は本来二段築成であった可能性が高い。その場合墳丘を復元すると、一段目は高さ約1.8m、二段目は径約8m、高さ約2mと推定される。一段目中位以上が盛り土である。

#### 2) 内部主体 (図7)

主体部掘方は墳丘中央部に位置し、旧地表面から掘られている。長軸をおおよそN-60°-Eにとり、規模は長さ約5.4m、幅約4mを測る隅丸長方形を呈する。石室主軸とはズレがある。内部主体は腰石の抜き跡から主軸をN-52°-Eにとる両袖単室の横穴式石室と考えられた。

南西方向に開口している。玄室は抜き跡から復元して長さ約2.6m、幅約1.9mと推定される。石室内は最近の数

回の掘削が認め られ、破壊は著 しいが、玄門に 近い床面敷石が 一部遺存してい た。それによる と掘り方床面に 約10cmの埋め土 をし、人頭大の 平石を敷き詰め、 隙間を小石で覆 って玄室床面と している。何れ も石材は花崗岩 であった。玄門 の立石は基底部 が残されており、 玄門間約70cm、 長さ約40cmであ る。玄門の間と 墓道側 1.2mの 位置に浅い掘

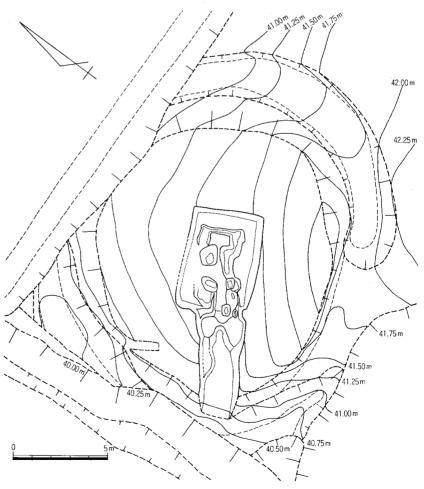


図6、地山整形図(1/200)

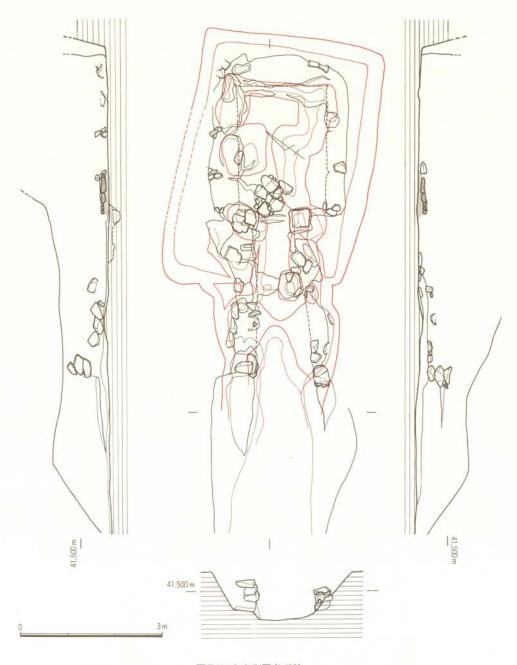


図7、石室実測図(1/80)

り込みがあり、仕切石の存在が予測される。壁面、天井部の構造は不明である。

美道部も多くの石材を失っているが、開口部分が残されている。それによると美道部の右側壁長は3.8m、左側壁長は3.6mであり、石室全長は6.9~6.7mと推定される。

#### 3) 墓道と閉塞施設 (図8、9)

墓道は先端部が破壊されているが、長さ約4.5m、幅3.1mを確認した。床面は羨道に近い部分で約3°、先端部で約15°の傾斜で墳端に下降する。墓道断面は基本的に逆台形を呈するが、追葬時の再掘削により規模を変えている。初期の墓道は幅2.7mであり、壁面中段に段がある。二次掘削時の墓道は幅2.4mで主軸がやや北側によっている。

墓道内埋土は5層群に区分された。上部から概観する。1層群は現表土と攪乱土である。2 層群は墓道内最上部にあり、自然流入土とみられる。3層群は二次墓道上部にあり、炭化物片、 土器片などを多く含む。人為的埋め土とみられた。層群上部に厚い腐植土層が形成されている。 4層群は二次墓道下部にあり、炭化物片が集中している部分があった。また、羨道開口部付近 に土壇状の高まりがあった。人為的埋め土とみられた。5層群は一次墓道内埋土を一括した。 また、墓道先端部の4層群直下の埋土も本層群に含まれる可能性がある。本層群は中位に一枚 の腐植土層を挟みさらに二分割される。その下半部に多くの土器類が出土した。

閉塞施設は本地域の同形態石室の場合、羨道途中の仕切石付近に設けられる場合が多い。本 古墳では既に破壊された可能性が強い。なお、羨道開口部付近の埋土中に礫の集中がみられた (図8)。これは計8個の花崗岩礫であり、何れも二次墓道内埋土に含まれている。それらは埋 土内の上部の3層群に3個、下部の4層群に5個が面的な集中を見せた。これらは閉塞ではな

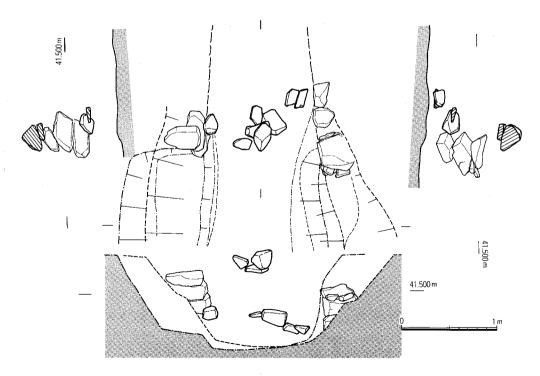


図8、閉塞関連遺構実測図(1/40)

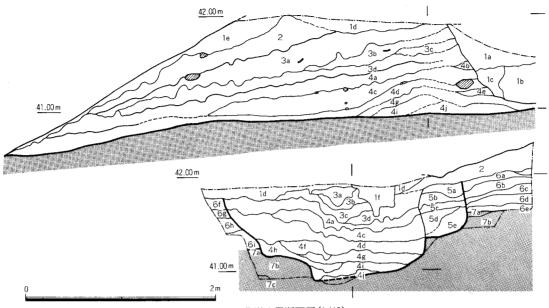


図9、墓道土層断面図(1/40)

- 1 a.
- 暗褐色土、軟質、木根多し、最も新しいカク乱部分(20~30年以内か)下面は凸凹がなく明瞭に接する。暗褐色土(赤褐色ブロック混り)比較的軟質であり、無層理状態を呈す。美道部に横長に掘られたカク乱である。暗褐色土。赤褐色(地山)ブロックを少量含み、炭化物片含む、15層とはやや不明瞭、1~5層を切る。
- 1 d.
- が推り、後にの人気が推放が、2個となった。 能、3層を切る。 暗茶褐色土、腐植混る、赤色粘土ブロック(地山土)、炭 化物片混入、全体に軟質下位層とは明瞭に区分、新しい 1 e. 上次的埋土とみられる(墳丘斜面、表土下部を形成)。
- 根のカク乱
- (暗) 黄褐色、砂粒を多く含む、軟質、上・下層に比べて、やや明るい土色、下位層に明瞭に区分される。 黒褐色土、(ややクロボク質)上位に黒色多し、下位にや
- 3a 黒商邑工、(マヤン)ロインは、上世に宗己タし、「世に下 や薄くなる、上下層に対して明瞭に区分される、特に下 面に凸凹が著しい下位に漸移的変化する(暗色帯)。
- 暗茶色土 (比較的均質である) 炭化物片を多く含む。上 3b
- 層(3a層)とは漸移変化示す。 暗~黒褐色土(上層と類似するが)より黒味強い
- 電 大学(1001 大学(1001 ) ためいます。 からいます (1001 ) ためいます (1001 ) ためいます (1001 ) ためいます (1001 ) たいます (1001
- やや漸移変化。
- 黒褐色土、軟質、腐植。 はやや漸移で凸凹あり。 腐植多く含む、上位には明瞭、下層に 4b.
- 茶褐色粘質土、赤褐色粘質土の小ブロックを多く含む 花崗岩小礫を含む、下面は比較的フラットであり、やや 明瞭に接する。
- 暗黄褐色粘質土、4c層より暗色である、赤褐色粘質土ブ 下面(地山) ロックを少量含む、炭化物片はやや少ない、 には明瞭。
- にはが明め、 暗褐色土、赤褐色(地山)粘土ブロック少量含む、全体 に軟質である、上・下層にはやや不明瞭。 明黄褐色土、素褐色土に赤色粘土ブロック混る、上・下 層とはあきらかに明瞭に区分され、しまり強め、粘質土。 暗茶褐色粘質土、地山ブロックを多量に含む、皮化物片も ⊿f
- 4g. 少量あり、やや硬くしまる。上・下層には明瞭に区分される。

- 暗褐色土、腐植土か、(4i層)よりもかなり黒く、わずか 4 h 暗物巴工、腐徳上が、(41層)なりもからかった、シッパ に赤色粘土を含む、しまり弱く粘質土。 暗褐色粘質土、炭化物片少量含む、上・下層に明瞭に区分。
- 4 i.
- 4 j.
- 派表褐色粘質土、部分的に黄褐色粘質土含む。 暗褐色土、ほぼ褐色土といえるがわずかに黒い、炭化物 片を少量含む、上層とは不明瞭に区分。しまり強く、粘 質土。
- 炭化物片を上層土やや多く含む、上層とは不明 5 b. 褐色土 瞭に区分。
- 黒褐色土、腐植土、細かな赤色粘土と砂粒含む、しまり 50
- 5d.
- 5 e.
- 黒褐色土、腐植土、細かな赤色粘土と砂粒含む、しまりやや強く、粘質は弱い。 暗黄褐色土、赤色粘土わずかに含む、上位層とは漸移的変化あり、しまり強く粘質土。 暗黄褐色土、(5d層)より赤色粘土多く含む。(5d層)よりやや暗いが明瞭に区分される、しまり弱く、粘質弱い。 暗黄褐色土、余り混じりなく、上部に炭化物片少量混入、
- しまり強く、粘質弱い。 茶褐色土、褐色土中に赤色粘土を含む、上・下層は明瞭 6b.
- 不何に上、何に上下にから和上を占む、上・ト層は明瞭 に区分、しまり弱く、粘質強い。 暗褐色土、腐植土層か黒く汚れている、しまり弱く、粘 60 質弱い。
- 6d
- 質明い。 暗褐色土、上位層より明るく、不明瞭に区分、炭化物片 少量含む、しまり弱く、粘質強い。 赤色土、赤色粘土層、下部に多量の褐色ロームを含む、 上部に炭化物片少量含む、上・下層とは明瞭に区分、し まり強く、粘質強い。
- 上部に赤色粘土ブロック含む、上位層とは不 暗褐色土 6f.
- 暗陶巴工、上部にから相上フロックもの、上位層とは下 明瞭に区分、しまり弱く、粘質弱い。 黄褐色土、混入物なく、上・下層とは明瞭に区分、しま り弱く、粘質強い。 暗褐色土、赤色粘土ブロック含む、下部がやや黒い、し
- 6h まり弱く粘質強い。
- い。 り強く、粘質強い。 黒褐色土上部黒く下部褐色、漸移的変化あり、赤色粘土 ブロックを含む、しまり弱く、粘質強い。 黒褐色土、上位より下位に漸移的変化が見られる、しま
- り弱く粘質強い
- 茶褐色土、花崗岩の風化層。

いが、閉塞施設に関連する石材と見られた。第4層群上部の風化土層の存在からそれぞれ時期 を異にするものと見られた。なお、第6層群は墳丘盛土、第7層群は地山である。

#### 4) 遺物の出土状態

本古墳では玄室、羨道の埋土中から副葬品であった武器類、武具類、馬具類、装身具類のほかに、須恵器、土師器類の破片も多く出土した。しかし、ほとんどが石室石材抜き取りなどで二次的に動いているものである。須恵器には杯蓋(22, 24, 27~29, 33)、杯身(41, 42, 45)、高杯(63, 65)、甕(96)、土師器には杯身(107)、杯蓋(101~103, 112, 114, 115)がある。

石室外では墳丘内への配列埋置された土器 1 群と墓道内や墳丘斜面、周溝内に破砕、散布した状態で多くの遺物が出土した。

墓道内からは多くの遺物が出土した。遺物は主に羨門に近い墓道東斜面部を中心に分布していた。遺物は1次墓道内に須恵器杯蓋14、高杯60~62、略68、甕84、土師器高杯116が出土し、2次墓道からは須恵器高杯53,54,58が出土した。1次墓道内の甕84はIV区墳丘斜面から周溝内にも多くの破片が散布している。この他層位区分できなかったが、須恵器杯蓋9,10,14,16,杯身40、高杯60、壺79,86、甕91、土師器杯身104,107~110も出土している。

遺物 C 群は I 区墓道外方の墳丘上に埋置状態で出土した。直上に樹木の根が張り、また墳丘盛り土の流出により掘方の検出が困難であり、遺物の散逸も予測された。遺物は根が絡み、取り上げに困難を極めた。掘り方は長さ80cm、幅60cm、深さ17cmを測り、上部に須恵器杯類 7、中位に花崗岩礫 1、下位に須恵器甕 1 が検出された。杯類は割れたものが多いが、出土状態から本来は完形状態で埋め置かれたものと見られた。甕は胴部中央が土壙底面に接し、破砕している。こうした点から図10の模式図のように掘り方内に甕を置き、礫で破砕、一定の埋め土後、杯類を乱雑に置いている。杯類は杯蓋 3、杯身 4 を確認したが、上部の流出、攪乱からみて本来はより多くの個体があったと見られる。

I 区墳丘斜面からは破砕された須恵器大甕(89)、甕(90, 93, 95)を中心に、杯蓋(9, 17, 25, 26)、杯身(39, 43, 44, 47, 50)、賤(67, 70, 72)、土師器杯身(111)などが散在出土した。Ⅳ区墳丘斜面からは須恵器杯蓋(22, 27~29, 33)、杯身(41, 42, 45)、高杯(56, 59, 64, 66)、壺(73, 74, 78)、賤(69, 71, 72)、甕(83, 84, 87, 88, 92, 97, 98)などの破片が出土した。そのうち壺74は据え置いた状態で出土し、また甕83は墓道床面から、甕84は墓道内と周溝内に分かれて出土した(図10)。また、特殊な遺物として紡錘車(1)と土製鈴(118)が墳丘斜面から周溝内にかけて出土した。

#### 5) 出土遺物

本古墳は墳丘や石室部分の破壊にともない、多くの遺物の散逸が予測される。したがって、 今回の調査で出土した遺物は、本来存在したもののごく一部であると見られた。こうしたこと から、整理、報告にあたっては個体識別できた遺物は全て取り上げることに努めた。その結果、

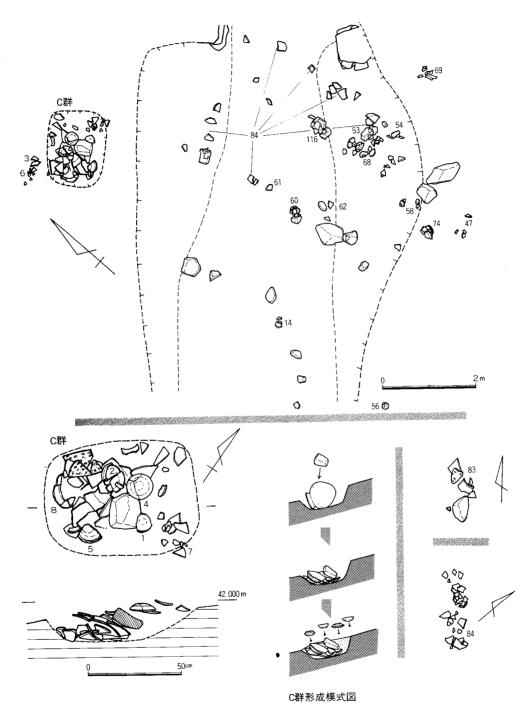


図10、墳丘および墓道内遺物出土状況図(1/80・1/20)

確認できた遺物は須恵器99点、土師器14点、装身具110点、鉄器41点、石製品1点、土製品1点 である。また、墳丘内などから古墳時代以外の遺物も少量出土した。なお、本地域の古墳では 鉄滓の供献例が多く、調査時にも注意したが、本古墳では1点の出土もなかった。

#### a, 須恵器 (図11~15)

出土した須恵器には杯類51、高杯類14、壺・瓶類11、06、甕類17がある。

杯類には杯蓋29、杯身22がある。これらは形態、法量などから以下のように杯蓋を4類、杯身を4類に区分した。杯蓋A類は肩に凹線や段があり、口唇部内側に弱い段を持つ。頂部のへラ削りは丁寧である。破片のために法量は不明であるが、口径14~15cm程度と見られる。24,30,34がある。杯蓋B類は口径13~14.5cmであり、頂部から口縁に緩やかに変化し、口縁端部は丸まる。へラ削りは口径の二分の一から三分の二の範囲に及んでいる。9~13がある。なお、13は低平で、へラ削りの範囲が広く、内面にへラ記号を持つなど変わった特徴を持つ。杯蓋C類は口径11~12.5cmであり、B類と類似する特徴を持つが、ヘラ削りの範囲が三分の二から四分の三以上に及ぶものが多い。1~3,15~18,21,22などがある。杯蓋D類は口径10cm以下のものであり、頂部は荒いへラ削りを施す。23がある。杯身A類は受部径14cm程度であり、口縁は受部からやや強く立ち上がる。口唇部は丸まる。へラ削りは丁寧であり、径の三分の二程度に及ぶ。41がある。杯身B類は受部径14~15cmであり、底部のヘラ削りはやや荒く、径の約二分の一に及ぶ。35,42がある。杯身C類は受部径13~14cmである。口縁は内傾し、立ち上がりは低い。ヘラ削りはやや荒く、二分の一から三分の一の範囲に及んでいる。4~6,37,38,40,43などがある。杯身D類は受部径13cm以下である。ヘラ削りの範囲が狭く、荒い。口縁は低く、内傾する。39,45~47などがある。

高杯は全て無蓋であり、長脚二段透かしのものと、短脚のものがある。長脚のものは 2 種類ある。杯部が深く、軸部がやや太いもので、上段より下段が短いもの(A類…53)と、杯部が浅く、軸部が細いもので、上段が長いもの(B類…54,55)がある。短脚のものは脚端径が10cm以上のもの(A類…59,61~64)と、10cm以下のもの(B類…60)がある。

壺には短頸壺1、広口壺2、長頸壺3、瓶4がある。広口壺85は頸部に二段の丁寧な波状文を施し、口縁端部に鋭い三角凸帯が巡る。やや古期の特徴をもつ。

甕は全体の器形のわかるものが少ないが、ある程度の復元ができた4個体を除いて、破片の個体識別を進めた結果、口縁部で3個体、胴部で11個体を抽出した。したがって、本古墳では最低でも15個体の甕が存在したことになる。復元できたものでは小型のもの(8)、中型のもの

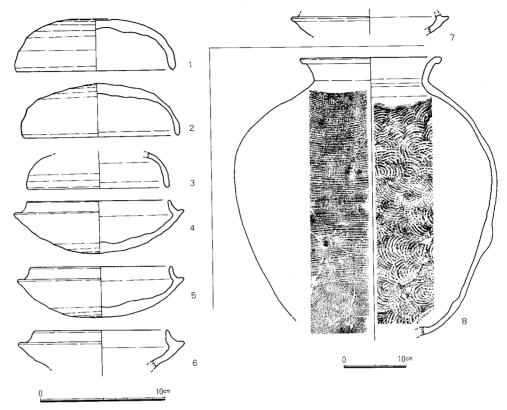


図11、出土須恵器(1)(1/3・1/6)

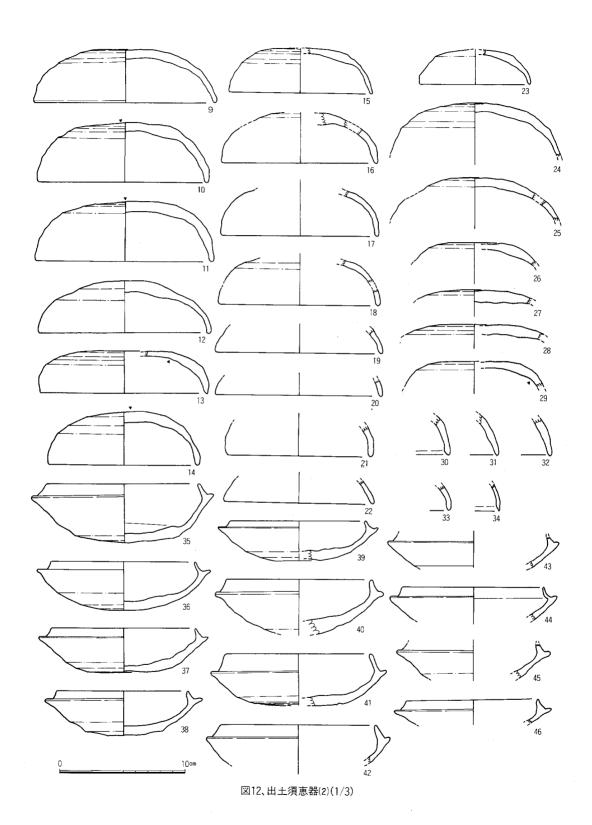
(35, 36)、大型のもの (89) がある。大型の89は器高約82cm、胴部径約67cmに復元された。頸部に波状文を施し、胴部の内外面をナデ、叩きを消している。そのほかでは胴部の調整から外面格子叩き後ナデ、内面平行叩き (a 群…90)、外面平行叩き、内面同心円叩き後ナデ (b 群…89, 93)、外面平行叩き、内面細目の同心円叩き (c 群…83, 92, 95)、外面格子叩き、内面同心円叩き (d 群…84, 91, 94, 96~100) の 4 種類がある。

以上みた須恵器は厳密な共伴関係は不明であるが、おおまかな出土状態や型式的特徴から、 以下の4時期に区分される。

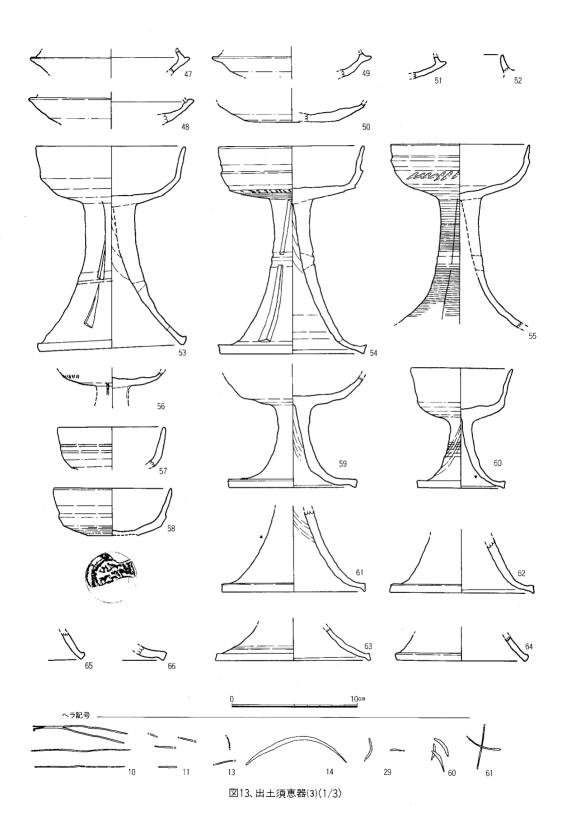
1期:杯蓋A類、鴎A類、広口壺 (85)、大型甕、甕 b, c 群などからなる。遺物量は少ない。 杯蓋や鴎、甕類にやや古い特徴を持つが、全体として陶邑におけるT K10からT K43にかけて、 小田富士雄編年における 3 a 新相から 3 b 古相の時期に位置付けられよう。

2期:杯蓋B類、杯身A,B類、長脚二段高杯A,B類、短脚高杯A類、璲B類、中型甕、甕d 群などからなる。遺物量は多く、多くの壺、瓶類も含まれよう。全体として若干の時期幅があ るが、おおよそ陶邑におけるTK43、小田富士雄編年における3b期に位置付けられよう。

3期:杯蓋C類、杯身C類、短脚高杯B類、聴C類、小型甕、甕d群などからなる。一括埋置



-16-



—17*—* 

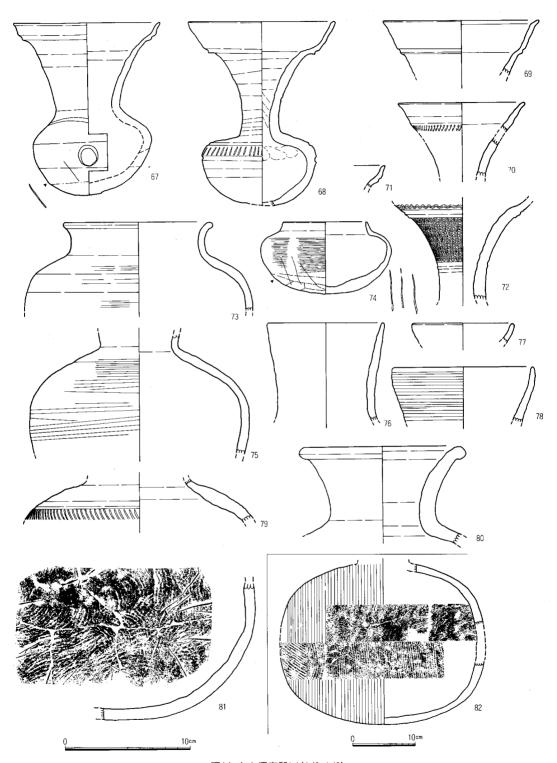


図14、出土須恵器(4)(1/3・1/6)

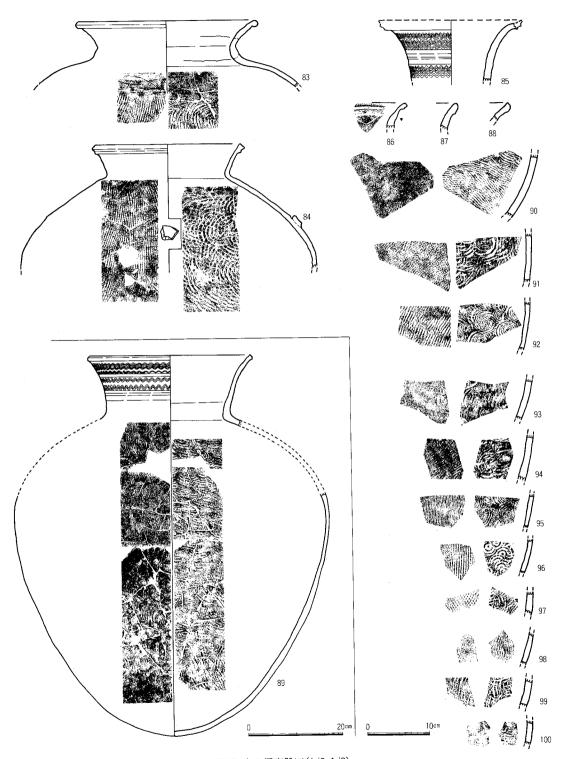


図15、出土須恵器(5)(1/6・1/8)

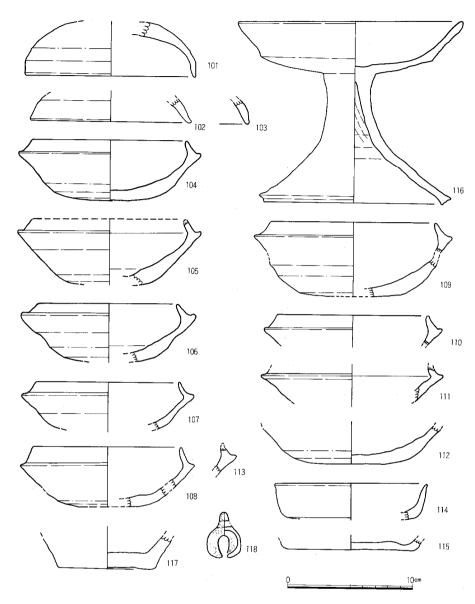


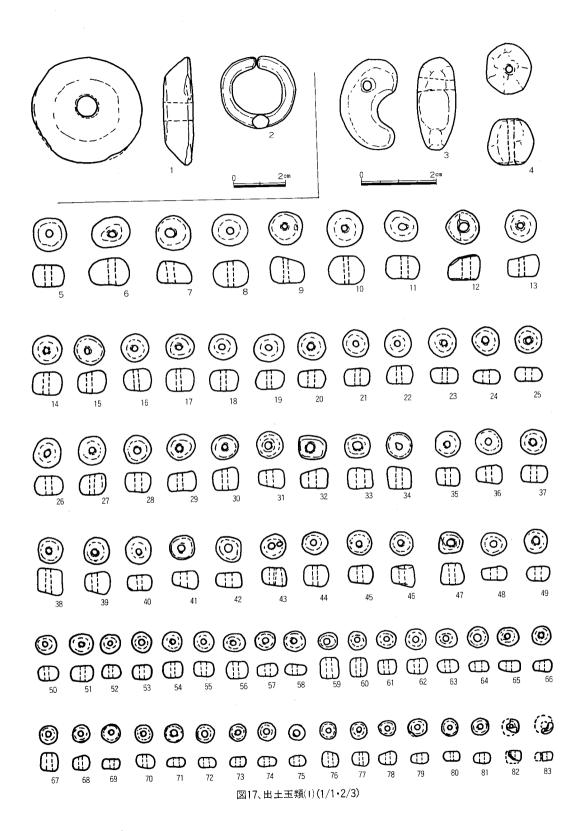
図16、出土土師器(1/3)

された遺物 C 群はこの時期になろう。 陶邑における T K 209、小田富士雄編年の 4 期に位置付けられよう。

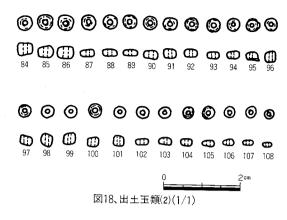
4 期:杯蓋D類、杯身D類、聴D類などからなる。遺物量は少ない。陶邑におけるTK217、小田富士雄編年における 4 期から 5 期にかけての時期になろうか。

#### b, 土師器 (図16)

出土した土師器は杯類11、高杯1であり、甕類はない。他に杯類の小破片が少量あり、本来



-21-



の個体数はこれより多かったと見られる。 杯類は須恵器を模倣した型式であり、杯蓋2、杯身9がある。これらはほとんどが石室内攪乱中からの出土であり、型式差は少ない。蓋、身ともに法量において2群に分かれる。杯蓋は口径約14cmのもの(A類…101)と、口径約13cmのもの(B類…102)がある。杯身は最大径が14.5~15cmのもの(A類…104, 105, 109~111)と、最大径が約14cmのもの(B類…106~

108)がある。しかし、これらは出土状態から本来一括で使用された可能性がある。高杯116は 須恵器短脚高杯60とともに墓道内に据え置いてあったものであり、杯類と同様に轆轤を使用し て作成されている。杯部は中段で強く屈曲している。軸部は絞りがあり、脚端に大きく開く。

#### c, 装身具 (図17, 18)

出土した装身具としては耳環、玉類がある。耳環は1点あり、銅心銀箔である。玉類には勾玉1、丸玉1、小玉107がある。勾玉は明緑色の硬玉製。丸玉は黄橙色の瑪瑙製、調整時の痕跡が残り、面取り状となる。小玉は全てガラス製であり、大きさから4群に分けた。A群は径約 $8\sim10$ mm、B群は $6\sim8$ mm、C群は $4\sim6$ mm、D群は4mm以下である。A群( $5\sim13$ )は9個あり、全てコバルトブルーである。B群( $14\sim49$ )は36点あり、明緑色の2点以外は全てコバルトブルーである。C群( $50\sim83$ )は35点ある。明緑色7点、コバルトブルー28点である。D群( $84\sim108$ )は27点である。明緑色5点、コバルトブルー19点、明青色3点である。この他にガラス製小玉片が4点ほどある。

#### d, 石製品 (図17)

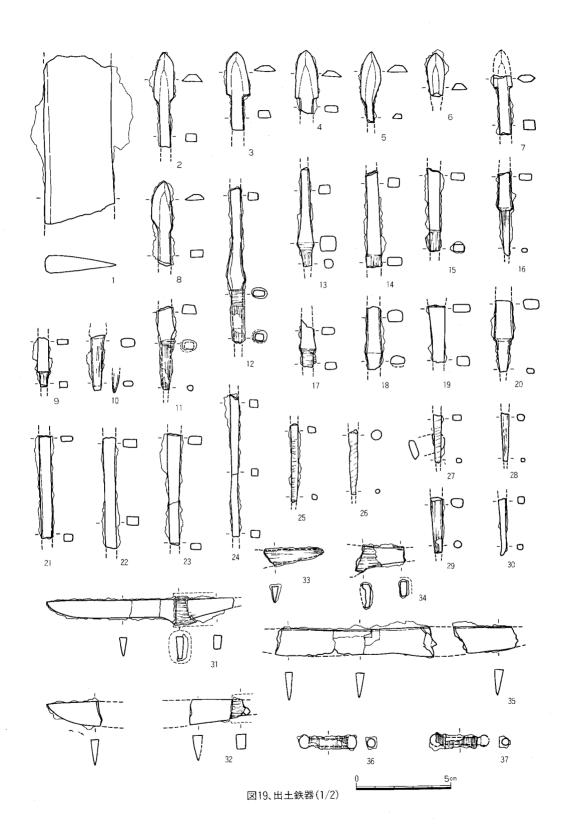
1は滑石製の紡錘車である。断面台形を呈し、径約4.2cm、厚さ1.2cmを測る。

#### e, 土製品 (図16)

118は土製鈴である。土師質の半欠品であり、長さ4.0cm、幅2.8cmを測る。ナデ調整後磨いている。焼成は良く、黄灰色を呈する。

#### f, 鉄器 (図19, 20)

武器類、武具類、工具類、馬具類がある。何れも主体部の攪乱中より出土した。全て破壊され、保存状態は悪い。武器類としては鉄刀、鉄鏃、弓金具、武具類として靱がある。工具類としては刀子がある。馬具には兵庫鎖などがある。刀 (1) は破片である。刃幅は約3.5cmを測る。鉄鏃 (2~30) は全て断片となり、全体を伺うことのできるものはない。鏃部 8 点、柄部12点、基部 6 点を数えることから少なくとも12個体以上はある。鏃型式は平根式主頭形が主体



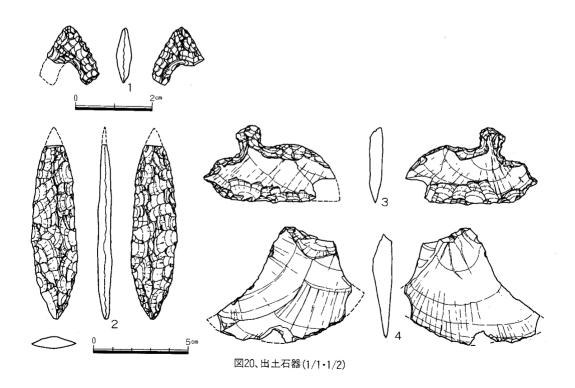
であり、平根式片刃形が1点ある(8)。弓金具は鋲飾りの弓に使用された飾り金具であり、2点出土した(36, 37)。36は全長3.1cm、木質(40) 幅2.05cm、37は全長3.2cm、木質幅2.2cmを測る。1振りの大型の弓があったと推定される。

なお、武具類と、馬具類については寄稿を頂いたのでここでは省いている。

刀子は断片で出土したもので、接合と個体識別の結果、刃部で3個体、基部で4個体を確認した。これ以外にも小破片があり、実数は4個体以上あるものと見られた。31は唯一全体を復元できたもので、刃長6.7cm、刃幅1.0cmの小型である。

#### 6) その他の遺物 (図16, 21)

墳丘盛り土中や周辺から縄文時代~弥生時代、近世に相当する遺物が出土した。遺物には土器片や石器がある。石器では石鏃、尖頭器、石匙、削器がある。石鏃以外は全て古銅輝石安山岩製である。石鏃(1)は黒耀石製であり、小型の鍬形鏃である。尖頭器(2)は先端部を欠損するが、推定全長10cmを超える剝離調整の入念な優品である。石匙(3)は横形であり、横長の不定形剝片を素材とし、周辺に加工を施したものである。発掘時に破損した。削器(4)は横長の不定形剝片を調整を加えず使用している。これらの石器は縄文時代早期に比定される。土器片では117は弥生時代中期の甕底部がある。114,115は土師質の皿である。何れも口径が12.2 cm程度に復元され、底部は荒い糸切り離しである。近世のものとみられた。



## 5 出土鉄器の研究

#### 1、タカバン塚古墳出土の帯状鉄製品について

宮代 栄一

#### A, 遺物の用途について

タカバン塚古墳からは、幅 2 cm、厚さ0.2cmの帯状の鉄製品 9 点が出土している (図21、22・図版 6)。

これらの金具は厚さ・幅等がほぼ等しく、さび方なども似ていることから、同一個体であった可能性が高いと考えられる。おそらく9点全部を合わせても、その推定の横幅は十数cm程度と思われ、かなりの部分が失われている可能性がある。

金具のほとんどには表面に直径0.3~0.5cm、高さ0.2cmの円形の鉄製鋲が打たれている。その間隔は約1.2cmで、それに伴う釘部は直径0.12cmほどと推定されるが、大半が欠失しており長さを確認することができない。

全体に形状には緩やかなカーブが確認できるが、カーブの屈曲点に相当すると思われる金具も2点ある。表面の一部には金と思われる剝片が点状に付着しているのが確認され、さらに内側には二重ないし三重の布目が観察され、一部には木質の付着も確認されている。これらのことから判断すると、この帯状鉄製品は

「内側に木質部を持ち、断面が弧状ないし半円形をなす鉄製品の一部」 であったと考えるのが妥当と思われる。

古墳時代におけるこのような形状 の遺物としては、馬具の一種で馬上 で体の安定を保つための金具である 「木芯鉄板張杓子形壷鐙」や「木芯 鉄板張三角錘形壷鐙」、さらには矢を 入れる道具である「胡籙」や「靱」 などが考えられる。以下、それぞれ について検討したい。

木芯鉄板張杓子形壺鐙は断面が半 円形をなす鐙の一種で、和歌山県大 (2) 谷古墳や兵庫県園田大塚山古墳など

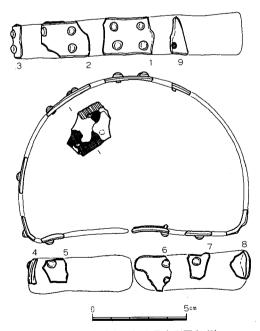


図21、タカバン塚古墳出土靱金具実測図(1/2)

から出土している。金具の外枠と前方に張り出す鳩胸金具の部分が鉄、足を入れる踏込(ふん ごみ)の部分が木で作られており、これらの点でタカバン塚古墳出土の帯状金具の条件を満た す。5世紀後半から6世紀前葉にかけて用いられたと考えられる。仮にこの帯状金具が木芯鉄 板張杓子形壷鐙であった場合、その鳩胸金具か外枠の弧状の部分に相当するものと思われる。

木芯鉄板張三角錘形壷鐙は、同じく鐙の一種で、鐙の外枠の断面形が三角錐状になっている のが特色である。杓子形壷鐙と異なり、前方に張り出す鳩胸金具のほかに、鐙の下方をめぐる 部分にも金属(鉄)を用いている場合がある。やはり足を入れる踏込の部分には木を用いる。

この種の鐙は福岡県寿命王塚古墳などから出土しており、佩用に際して上部に兵庫鎖を伴う ことが多い。6世紀中葉から7世紀前葉の比較的長い時期にわたって用いられたと考えられる。 帯状金具が木芯鉄板張三角錘形壷鐙であった場合、鳩胸金具の上部か、鐙の下方をめぐる部分 であった可能性が高い。

胡籙・靱は矢を入れる金具の一種で、一部に金属を用いたものは韓国・日本などをあわせ約 120以上の古墳から出土している。全体の形は細長い箱状または筒状で、本体を木でつくり、そ の表面に布を張ることもある。本体の断面は四角形ないし半円形をなすことが多い。これらの 胡籙・靱は重要な部分に金属(鉄・鉄地金銅など)を用いていることが多く、その金具には、 ベルトをつけてつり下げるための吊手を飾る「吊手飾金具」、本体を外側から押さえ留めるため

る「底板責金具」などがある。タカバ ン塚古墳出土の帯状金具が胡籙ないし 靱であった場合、断面が半円形をなす 形状等からみて、「帯飾金具」ないし「底 板責金具」等に用いられた金具である 可能性が高い。

の「帯飾金具」、底の部分の周囲につけ

以上、鐙と胡籙・靱、両方の可能性 について概観してきた。ところで問題 の金具の内側には、鉄板の上部を覆う 形で布と木質が残存しており、その構 造を復元すると「木でできた本体→(そ こに漆を塗って、その上に)布→(さ らにその上に)鉄板」という形になる。 一方、古墳時代の杓子形壷鐙や三角錘 形壷鐙で木質の上に布を張るような例 はほとんど確認されておらず、また中

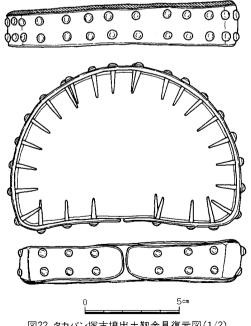


図22、タカバン塚古墳出土靱金具復元図(1/2)

でも杓子形壷鐙はその盛行期が6世紀前半までということもあって、当古墳出土の遺物の年代 とは少しずれている。

これらのことから考えて、ここではタカバン塚古墳出土の帯状鉄製品は、胡籙ないし靱の「帯 飾金具」ないし「底板責金具」の一部であったと推定される。

#### B,類例の検討

古墳時代の胡籙については、田中新史氏、坂靖氏らによって、すでに詳細な編年が行われている。ここでは田中氏の分類に従って分析を行う。

田中氏は古墳時代の胡籙・靱を、A容器本体・B吊手飾金具・Cその他の付属金具に大別し、 さらにAを5種にBを3種に細分している。

タカバン塚古墳出土の胡籙・靱金具は、その形状から、本体の断面が半円形をなしていたと推定される。このような形の金具を用いた胡籙・靱金具としては、兵庫県西宮山古墳例、大分県飛山23号横穴例、岡山県四つ塚13号墳例、岡山県八幡大塚2号墳例などがある。

西宮山古墳は共伴遺物からMT15型式期及びMT85型式期、同じく飛山23号横穴はTK43型式期、四つ塚13号墳はMT15型式期に相当すると考えられる。ただしこれらの古墳の例では、帯飾金具に三葉形の立飾りを用いており、タカバン塚古墳例とはその点で異なる。材質はすべて鉄地金銅張である。一方八幡大塚2号墳例は底板の責金具と推定され、材質も鉄製で、TK43型式期のものと考えられる。

さらにタカバン塚古墳例では、その表面に鉄製の中型の鋲が二列に打たれている。このように鋲を二列に打ち込む例としては、岡山県八幡大塚 2 号墳例、京都府宇治二子山南墳例、千葉県経僧塚古墳例、福岡県宮の上 4 号横穴例、島根県御崎山古墳例、島根県上塩冶築山古墳例などの例がある。

京都府宇治二子山南墳例は鉄地金銅張であり、表面に波状列点文が施されている。同古墳は陶邑編年のTK208からTK23型式期に相当すると考えられる。一方、経僧塚、宮の上、御崎山、上塩冶築山の各出土例はすべて鉄でつくられており、経僧塚はTK209型式期、宮の上4号横穴は共伴遺物からTK209型式期、御崎山古墳はTK209型式期、上塩冶築山古墳はTK43型式期に相当すると考えられる。以上のことからみて、タカバン塚古墳出土の胡籙金具は、TK43型式期からTK209型式期にかけて副葬された可能性が高い。

これらの類例のうち、西宮山古墳例、飛山23号横穴例、宇治二子山南墳例は吊手金具を伴っており、明らかに「胡籙」である。さらに二子山南墳例について言えば、材質が鉄地金銅張であり、時期的にもかなり先行することから、タカバン塚古墳例とは系譜を異にするものと考えられる。それ以外の八幡大塚2号墳例、経僧塚古墳例、宮の上4号横穴例、御崎山古墳例、上塩冶築山古墳例は、すべて鉄製で吊手金具を伴わないことから、「靱」である可能性が高い。

これらの二列の鋲を施す帯飾金具(ないし底板責金具)としては、おそらく奈良県藤の木古

(19) 墳例が初現と思われ、それ以降6世紀後半から7世紀にかけて全国的に出土例が増加していく。 藤の木古墳例では端部の金具の周囲にも鋲を打ち、鋲の間隔が密であるなどの点でやや古い様相を示している。続いて御崎山古墳例などではその間隔がやや大きくなる傾向が見られ、さらにこのタイプが発展したと思われる京都府湯舟坂2号墳例になると、二列に鋲は打つものの、その鋲の位置が上段と下段で互い違いになるなど、より装飾性が高まっていく。

これらの類例のうち、タカバン塚古墳例に最も近いものとしては、前述した八幡大塚 2 号墳 例と宮の上 4 号横穴例があげられる。中でも八幡大塚 2 号墳例の場合、鋲の間隔は約 1 cm。さらに復元した場合の金具横幅が約12cm、たて幅は約 3 cmであり、たて幅がやや大きいことを除けば、タカバン塚古墳例とほぼ同じ大きさであったと思われる。型式的には御崎山古墳タイプと湯舟坂 2 号墳タイプのちょうど中間にあたるだろう。湯舟坂 2 号墳は共伴遺物から T K 43から T K 217型式期という年代が与えられており、年代的にもうまくあう。

八幡大塚 2 号墳例は前述したように、「靱」の底板の責金具であると推定される。タカバン塚 古墳例の場合も、(吊手金具が失われている可能性はあるが)、材質 (いずれも鉄製である) な どの点からみて、少なくとも「靱に伴う金具」と考えてよいのではなかろうか。

さらに今回出土した金具の特色としては、その内面に漆と布の痕跡が確認された点をあげることができる。古墳時代の胡籙・靱金具の裏側には、木質のほかに布痕が確認されている例がいくつかあるが、中でも興味深いのは、それらのいくつかにおいて、「布の一部が金具の縁からはみ出すようにして付着している」という点である。タカバン塚古墳例でもその痕跡が確認された。このような布はおそらく「その端部の一方を金具の下に、一方を外側の木質部の本体の上にして、はみ出すように」張り付けられていたと考えられる(復元図参照)。黒漆はその接着などのために用いられたのではないか。

このような技巧を施した遺物としては、古墳時代の馬具の中に類例を認めることができる。例えば島根県上塩冶築山古墳出土の鞍金具の場合、鞍の磯金具の内側の縁部分に、飾りひも状に布の一部をはみ出させている。これらは強度などの点で意味を持つものとは考えがたく、またそれをひも状にめぐらせていることなどから、装飾的な意味合いを持ったものと考えられる。

さらにこのような「木質の部分の上に漆を塗り、さらにその上に布を張り、さらにその上から金属の部分を載せる」という技法は、やはり古墳時代の金属装鞍に認められる技法であり、これらの点から、胡籙・靱金具の工人と馬具の工人との間には何らかの技術的な交流があった可能性が高いと考えられる。例えば上塩冶築山古墳などの場合、鞍金具と靱が同一の工房で同時に作られた可能性さえあるのではないだろうか。

最後にこのような胡籙・靱金具を出土する古墳の性格について述べておきたい。前述したように、2列の鉄鋲を打つ帯状の胡籙ないし靱の金具は、千葉、奈良、島根、福岡など関東から 九州にかけての広い地域で出土しており、その時期は6世紀後半以降に限定されている。これ 筆者もその見解に賛成であり、これらの金具はおそらく同一ないし、同一系列の工房で製作され、中央政権によって各地域の支配者層に配布された可能性が高いと考える。例えばタカバン塚古墳と同様の金具を出土した御崎山古墳・上塩冶築山古墳・湯舟坂2号墳などからは飾大刀・鉄地金銅張馬具等の優品が多数出土しており、これらの古墳はいずれも各地域の最有力者層を埋葬したと考えられている。本墳の場合は残念ながら、盗掘のため遺物の全容がはっきりしないものの、それらに匹敵する遺物が副葬されていた可能性は少なくないように思われる。

#### 註

- (1) 鐙の編年については、斎藤弘「古墳時代の壷鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 1986 PH ALANX-古墳文化研究会 による。斎藤氏からは、このほか多くのご教示をいただいた。
- (2) 樋口隆康・西谷真治・小野山節『大谷古墳』和歌山市教育委員会 1959
- (3) 梅原末治・小林行雄「川辺郡園田村大塚山古墳と其の遺物」『兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十 五輯 兵庫縣 1941
- (4) 梅原末治・小林行雄『筑前嘉穂郡王塚装飾古墳』京都大学文学部考古学報告第十五冊 1940
- (5) 田中新史「古墳時代の胡籙・靱金具」『井上コレクション 弥生・古墳時代資料図録』言叢社 1988
- (6) 註5に同じ。
- (7) 坂靖「胡籙の復元~寺口千塚の資料を中心として」『古代学研究』120号 1990 同「胡籙の系譜」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV 1992
- (8) 『富雄丸山古墳・西宮山古墳 出土遺物』京都国立博物館 1982
- (9) 『飛山』大分県文化財調査報告第28輯 大分県教育委員会 1973
- (10) 近藤義郎『蒜山原』 1954
- (11) 鎌木義昌「岡山市八幡大塚古墳」『考古学研究』13-4 1967
- (12) 本稿では相対年代の表現方法として、田辺昭三氏による陶邑における須恵器の型式名を使用した。用いた型式名は以下の通りである。TK208、TK23、TK47、MT15、TK10、MT85、TK43、TK209、TK217。
- (13) 『宇治二子山古墳』宇治市教育委員会 1991
- (14) 市毛勲「千葉県山武郡成東町経僧塚古墳の調査」『史観』83 1971
- (15) 『稲築公園内遺跡』稲築町教育委員会 1975
- (16) 勝部昭「御崎山古墳」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会 1975
- (17) 『島根の文化財』 3 島根県教育委員会 1963
- (18) 栗林誠治氏のご教示による。
- (19) 『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』斑鳩町教育委員会・橿原考古学研究所編 1990

- (20) 註5に同じ。
- (21) 註18に同じ。
- (22) 『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会 1983
- (23) 註18に同じ。
- (24) 岡田文男氏の分析による。
- ② 栗林誠治氏のご教示によれば、八幡大塚2号墳や御崎山古墳例などでも布の痕跡が認められるという。
- (26) 島根県立博物館にて実見の機会を得た。
- ② 例えば滋賀県鴨稲荷山古墳出土鞍金具や、兵庫県園田大塚山古墳出土鞍金具などに認めることができる。 京都大学文学部博物館にて実見。
- (28) 註5に同じ。

#### 2. 帯状鉄製品に銹着した布について

岡田 文男

(財)京都市埋蔵文化財研究所

帯状鉄製品の裏面に銹着した布について、繊維と織りの質や状態を観察した (図版1)。

実体顕微鏡下では平織りの布が幾層も重なっているのが確認できた。繊維は大変細く、鉄銹で褐変している。一部、漆で固着している所がある(写真1)。

資料を断面から観察するために、遺物表面から布部分を採取した。これを常法によりエポキシ樹脂に封入し、研磨により厚さ数 $\mu$ mの薄片を作成した。試料断面の観察によると、布の重なりをやや不明瞭ではあるが 4 層確認することができた(写真 2)。糸断面の繊維の形状は均一で、どれも偏平な不等辺三角形をしており、形状から絹であると判断した(写真 3)。糸 1 本に 200本以上の絹繊維が計測できた。絹繊維の断面径は長径がおよそ $15\mu$ m、短径が $5.5\mu$ mである(写真 4)。

## 3, タカバン塚古墳出土の馬具について

宮代 栄一

タカバン塚古墳からは3点の馬具と思われる鉄製品が出土している(図23、図版 6)。このうち1の金具は長さ5.4cmで、その先端が1.4cmほど内側に屈曲している。馬の腹帯などを留めるバックルである「鉸具」の輪金の一部であろうと思われる。

2の金具は幅2.5cmで、直径0.5cmほどの鉄の輪の一部が2点、銹着した形で出土している。 おそらく、環状鏡板付轡の立聞部分につけられていた「兵庫鎖」の一部であろうと推定される。

3の金具は長さ2.3cm、幅2.9cmで、内湾する緩やかなカーブを描く。直径6~7cmほどの円環状の金具の一部分であった可能性が高い。鉄板の厚さは0.2cmで表面に革膜の痕跡らしきものが認められる。このような金具としては、馬のベルトを固定するための「環状雲珠・辻金具」ないし、ベルトから吊り下げて装飾とするための「環状杏葉」が考えられる。

1の鉸具については6世紀後半以降という程度の年代しか分からない。しかし残りの2と3の金具については、ややくわしい年代を求めることができる。

2のような兵庫鎖を伴う「環状鏡板付轡」は、かつて岡安光彦氏によって「長連兵庫鎖連結環状鏡板付轡」として分類されたもので、このような兵庫鎖をいくつも重ねて連結するのを特色とする。このタイプの初現と考えられるのは、愛知県豊田大塚古墳例や岡山県四つ塚1号墳例であり、共伴遺物等からMT15型式期に相当する。岡安氏によれば、この系列の轡は時代が下るにつれて兵庫鎖が短くなる傾向が認められ、最後には兵庫鎖一つを立聞につけるのみになってしまう。立聞に兵庫鎖を一つつける例としては、大阪府山畑22号墳例などがある。山畑22号墳は伴う馬具などからMT85~TK43型式期の年代が考えられる。以上のことから、2の金具

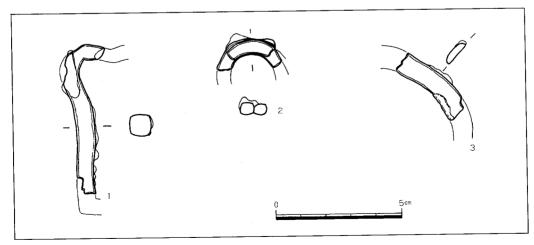


図23、タカバン塚古墳出土馬具実測図(2/3)

については、これが複数存在したとすればMT15期~TK10型式期、もともと一つしかなかったとすればMT85期~TK43型式期という年代を与えることができる。

3の金具については、2と同様に想定される用途の違いによって与えられる年代に幅が出てくる。「環状雲珠・辻金具」は京都府宇治二子山古墳、滋賀県新開古墳南遺構、兵庫県西宮山古墳などから出土しており、5世紀第2四半期からMT85型式期にかけて用いられたと考えられる。「環状杏葉」は、栃木県下石橋愛宕塚古墳から類例が出土している。同古墳からの出土例には直径約7㎝のもの、同じく5.6㎝のもの、同じく4.6㎝のものの大きく分けて三種があり、こちらは鉄地金銅張である。時期はTK209型式期である。

以上のことからタカバン塚古墳出土の3の金具については、5世紀第2四半期からMT85型式期と、TK209型式期の二つの年代を考えることができる。ただし本古墳出土例に関して言うと、環状雲珠・辻金具にしては、その環のつくりがやや薄手であり、さらに6世紀中頃に入ると環状雲珠・辻金具は急激に減少することなどから、「環状杏葉」の可能性が高い(時期としてはTK209型式期)とみてよいのではないか。

このようなことから考え、タカバン塚古墳には当初複数の馬具のセットが副葬されていた可能性が高いと想定される。その一つは「兵庫鎖連結環状鏡板付轡」に代表される、やや古手の馬具のセット(MT15型式~MT85型式期)であり、もう一つは「環状杏葉」に代表される新しい馬具のセット(TK209型式期中心)であったと思われる。ただ、3の金具が「環状雲珠・辻金具」であって、2の「兵庫鎖連結環状鏡板付轡」とセットであった可能性も完全には捨てきれない。その場合タカバン塚古墳の馬具の年代は、MT15~MT85型式期に求めることができるだろう。

本稿の執筆にあたっては内山敏行、岡田文男、栗林誠治、斎藤弘、谷畑美帆、中村享史、本 田光子、吉留秀敏の各氏に大変お世話になった(以上五十音順)。記して感謝申し上げる。

#### 註

- (1) 岡安光彦「いわゆる"素環の轡について"-環状鏡板付轡の型式学的分析と編年」『日本古代文化研究』創 刊号 1984 PHALANX-古墳文化研究会
- (2) 『豊田大塚古墳発掘調査報告書』豊田市教育委員会 1966
- (3) 近藤義郎『佐良山古墳群の研究』 1952
- (4) 『大阪府史』大阪府 1978ほか
- (5) 「新開古墳」『滋賀県史跡調査報告第十二冊』滋賀県教育委員会 1961
- (6) 常川秀雄「下石橋愛宕塚」『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』栃木県埋蔵文化財報告書第12集 1974

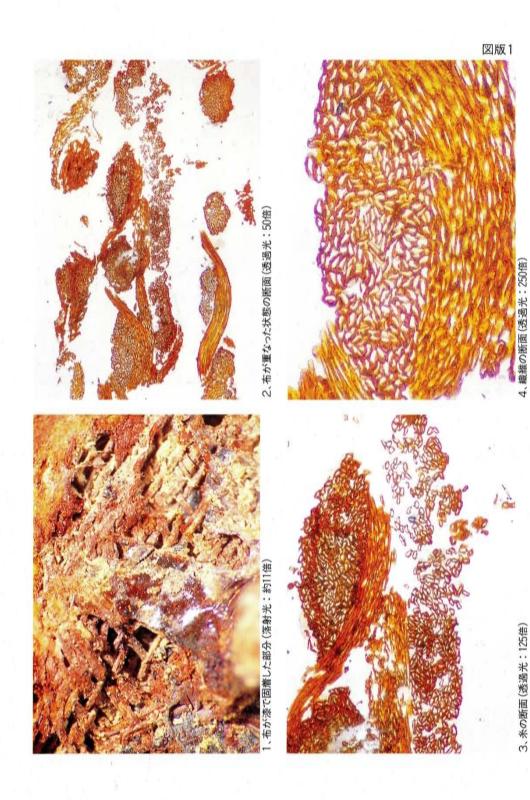
### 出土須恵器観察表 1

Щ_		<b>吞觀祭</b>	32 1												
No.	器種	残存率	出土位置	法量	焼成	へラ 記号	底部へラ 削り方向	No.	器種	残存率	出土位置	法量	焼成	へラ 記号	底部ヘラ 削り方向
1	杯蓋	ほぼ完形	I 区墳丘端部C群 I 区墳丘端部埋土~ 埋土上部C群	12.5×4.2	良好	_	右	30	杯蓋	3×2.5cmの 口縁部破片	I 区玄室内埋土~ 埋土上部内		普通		_
2	杯蓋	ほぼ完形	I 区墳丘端部C群 I 区墳丘端部埋土~ 埋土上部C群	12.2×4.3	良	_	右	31	杯蓋	4×3.5cmの 口縁部破片	I 区玄室内埋土~ 埋土上部	_	普通	_	_
3	杯蓋	口縁部1/4	I 区墳丘斜面埋土~ 埋土上部 I 区墳丘端部C群	(11.1)×—	良		_	32	杯蓋	3.5×1.5cmの 口縁部破片	-	_	良		_
4	杯身	完存品	I区墳丘端部C群	11.4×4.1	良好	_	右	33	杯蓋	1.5×1cmの 口縁部破片	I ~Ⅳ区周溝内埋土~ 埋土上部		良	_	-
5	杯身	全体1/2	I 区墳丘端部C群 I 区墳丘斜面埋土~ 埋土中C群	11.4×4.0	良好	_	右	34	杯蓋	2×1.5cmの 口縁部破片	I 区玄室内埋土~ 埋土上部内	<u> </u>	良	_	-
6	杯身	口縁部1/5	I 区墳丘斜面埋土~ 埋土上部 I 区墳端部 C 群	(10.6)×-	やや不良	_	-	35	杯身	ほぼ完形	『区域反端部型土~埋土上海、トレンチ 1区支室内床面上、7区支室 内床面上	12.1×4.7	良好	_	右
7	杯身	胴部1/9	I区墳丘端部C群		_			36	杯身	全体1/3	Ⅱ・Ⅲ区玄室内埋土~埋土上部 墓道内埋土~埋土上部 Ⅲ区玄室内埋土~埋土上部	(11.2) × (4.3)	やや不良 生焼け	_	0
8	甕	口練部1/4、胴部1/2 欠損、項部欠損	I 区墳丘端部埋土~ 埋土上部C群 I 区墳丘斜面埋土~ 埋土上部C群	22.4×-	普通		-	37	杯身	全体1/4	I 区墳丘斜面埋土~ 埋土上部	(11.5) ×3.5	良	_	左
9	杯蓋	全体1/2	【区域丘端部埋土~埋土上部 【区玄室内埋土~埋土上部 裏道内埋土~埋土上部、トレンチ	(14.8) ×4.5	良好	_	右	38	杯身	全体1/2	墓道内カクラン	12.6×3.7	良	_	右
10	杯蓋	全体2/3	墓道内埋土~ 埋土上部 トレンチ	13.6×4.9	良好	外〇	右	39	杯身	全体1/5	I 区墳丘端部埋土~ 埋土上部	(10.9) ×3.2	普通	_	_
11	杯蓋	全体2/3	I 区玄室内床面上 I ~ Ⅳ 区周清埋土~ 埋土上部	14.4×4.9	良好	外〇	右	40	杯身	全体1/3	IV区墓道内埋土~ 埋土上部 IV区墓道内埋土中	11.9×(4.5)	良好	_	右
12	杯蓋	全体1/3 (口縁部1/8)	I 区墳丘端部埋土~ 埋土上部 V区玄室内床面上	(13.3) × (4.5)	不良 生焼け	_	0	41	杯身	口縁部1/4 底部付近1/4	Ⅳ区境丘斜面埋土~埋土上部 Ⅳ区境丘斜面表採、 Ⅳ区境丘端部埋土~埋土上部	(11.8) × (4.1)	やや不良		左
13	杯蓋	口縁部~ 項部1/10	I 区墳丘斜面埋土~ 埋土上部	(13.3) × (3.5)	良好	内〇	右	42	杯身	口縁部1/4	I ~ Ⅳ 区 周溝 内埋土 ~ 埋土上部 Ⅳ 区 墓道 内埋土 ~埋土上部	(12.4) ×—	普通	_	_
14	杯蓋	ほぼ完形	N区幕道内埋土~埋土上部 N区前庭部埋土~埋土上部	12.1×4.4	良好	外〇	右	43	杯身	口縁部1/8	I 区墳丘斜面埋土~ 埋土上部	(11.8) ×—	普通	_	_
15	杯蓋	全体1/5 (頂部1/9)	Ⅲ区周溝内埋土~ 埋土上部	(11.4×3.6)	良好	_	右	44	杯身	口縁部1/7	I 区前庭部埋土~ 埋土上部	(11.3) ×	良		-
16	杯蓋	口縁部1/5	墓道内 カクラン	(12.4)×—	やや不良		0	45	杯身	口縁部1/6	I ~ W区周溝内埋土~ 埋土上部	(10.4) × —	普通		_
17	杯蓋	口縁部1/10	I区填丘斜面埋土~埋土上部 I区玄室内床面上 驀道内埋土~埋土上部	(11.4)×—	やや不良 生焼け	_	-	46	杯身	口縁部1/9	I 区墳丘斜面埋土~ 埋土上部	(10.5) × —	良	_	_
18	杯蓋	1×2mの日練部破片 4×3cmの頂部破片	I区周溝内黒色土中 墓道内カクラン	(12.6) × —	やや不良 生焼け	_	-	47	杯身	口縁部1/4 (ただしロ唇部が損)	墓道内	(10.4) × —	普通	_	-
19	杯蓋	口縁部1/5	I 区周溝内埋土中 I ~ Ⅳ 区周溝内埋土~ 埋土上部	(13.2) × —	普通	_	-	48	杯身	3×3cmの 胴部破片	I·区周溝内床面上	(13,2)×-	普通	_	_
20	杯蓋	1.5×3.5cmの 口縁部破片	トレンチ	(13.1)×—	良	_	_	49	杯身	胴部~口縁部にかけて 1/6(口唇部は欠損)	Ⅳ区玄室内床面上	_	やや不良 生焼け	-	-
21	杯蓋	2.5×3cmの 口縁部破片	【区玄室内埋土~ 埋土上部	(11.6)×-	普通 生焼け	-	-	50	杯身	底部1/5	Ι区	_	普通	_	右
22	杯蓋	口縁部1/10	Ⅳ区周溝内床面上	(11.8) ×—	良	-	-	51	杯身	3×2mの日縁部破片 (たたし日軽部欠損)	I 区周溝内カクラン	_	普通	_	_
23	杯蓋	全体1/2	IV区墳丘部埋土~ 埋土上部 IV区周溝内	$9.0 \times 2.8$	良好	_	右	52	杯身	1.5×2cmの 口縁部破片	_	_	普通	_	_
24	杯蓋	全体1/5 (沈知賴都坎撒)	Ⅳ区墳丘斜面表土、 埋土~埋土上部 [~阪職內埋土~埋土上部	_	普通	_	左	53	高杯	口縁部1/3欠損	IV 区墓道内埋土~ 埋土上部	12.0×16.5	良	_	_
25	杯蓋	項部残存	I 区域丘端部埋土~埋土上部 I 区玄室内埋土~埋土上部	_	やや不良 生焼け	_	左	54	高杯	口縁部1/6欠損 脚部1/7欠損	N区基道内埋土~埋土上部 N区填丘端部埋土~埋土上部 N区周溝内床面上	11.9×17.4	良	_	左
26	杯蓋	項部1/5	I 区墳丘端部埋土~ 土上部	_	良	-	左	55	高杯	杯部1/5 軸部1/3欠損 脚部若干	IV区玄室内床面上 I·N区間構内型土~埋土上部 I·N区境丘斜面表土、驀進内	11.2×-	良	-	
27	杯蓋	項部1/5	I~Ⅳ区周溝内埋土~ 埋土上部	_	普通		左	56	高杯	杯底部残存	Ⅳ区前庭部埋土~ 埋土上部、墓道内	_	普通	_	-
28	杯蓋	項部1/5	I~Ⅳ区周溝内埋土~ 埋土上部		普通	-	0	57	高杯	杯口縁部1/9	III・ <b>IV</b> 区周溝内表採	(8.0) ×	良	-	-
29	杯蓋	項部1/5	I、N区周溝内埋土~ 埋土上部	_	良	内〇	右	58	高杯	杯部1/2	I・Ⅳ区周溝内埋土~ 埋土上部 墓道内	(9.9) ×	良	_	_

### 出土須恵器・土師器観察表2

	nn		帥		Late . 15.	A =	底部ヘラ		DD AA	745	11. 1. 44. 124	NJ. E	مذاب علما	~ <del>7</del>	底部へラ
No.	器種	残存率	出土位置	法量	焼成	記号	底部ヘラ 削り方向	No.	器種	残存率	出土位置	法量	焼成	記号	削り方向
須	恵器									口縁部1/3欠損	I ~ N区間溝内埋土~埋土上部 I 区境丘場部A群、C群、埋土~埋土 上部、間溝内カクラン、埋土~埋土				
59	高杯	杯底部残存 脚端部1/4 軸部ほぼ残存	I・Ⅳ区周溝内埋土~ 埋土上部		良好	_	-	89	甕	胴部〜底部 にかけて1/3 胴部上〜肩部存せず	上部、前庭部理士~埋土上部、II区 填丘斜面A群 W区填丘端部埋土 ~埋土上部、周溝内埋土~埋土上部 藝道内埋土~埋土上部、玄室内埋土		普通	_	_
60	高杯	杯部口径1/2欠損 脚端部2/3欠損 軸部ほぼ残存	Ⅳ区墓道内埋土~ 埋土上部	8.6×9.6	良	内〇	右	90	甕	10×12cm⊘	~埋土排 IV区墳丘端部埋土~	_	良	_	_
61	高杯	軸部~脚端部 1/5	<ul><li>I·W区粉清內理土~埋土上部</li><li>I~W区募道內理土~埋土上部</li><li>W区募道內理土中</li></ul>	_	良	外〇	_	91	甕	胴部下位破片 5×8cmの 胴部破片	埋土上部、周溝内表土 I区墓道内埋土~埋土上部 II区玄室内床面上	_	良好	_	_
62	高杯	脚端部~軸部 にかけて1/4	IV区墓道内埋土~ 埋土上部	_	良	-	-	92	甕	6×7cmの順部破片(同 一個体の小磁片他に もあり 接合は不可	Ⅳ区墳丘斜面埋土~ 埋土上部	_	良	_	-
63	高杯	脚端部1/3	₩区玄室内床面上	_	良好	_	-	93	甕	5×7cmの 胴部破片	I 区墳丘端部B群	-	良	_	_
64	高杯	25×3cmの 脚端部破片	I ~Ⅳ区周溝内埋土~ 埋土上部	_	良	_		94	甕	5×6cmの 胴部破片	I ~Ⅳ区周溝内埋土~ 埋土上部	_	良	_	_
65	高杯	2.5×2.5cmの 脚端部破片	Ⅲ区玄室内床面上	_	普通	_	_	95	甕	5×5cmの 胴部破片 5×5cmの	I 区墳丘端部埋土~「埋土上部	_	普通	-	-
66	高杯	2×2cmの 脚端部破片	I~Ⅳ区周溝内埋土~ 埋土上部	_	普通	_		96	甕	胴部破片 4×5cmの	N区玄室内床面上 N区填丘斜面埋土~	_	良良良好		_
67	璲	(ほぼ完形 (口線部若干残存)	I区墳丘端部A群	11.7×14.0	良好	<b>外</b> 〇	右	97	甕甕	胴部破片 4×4cmの	埋土上部 Ⅳ区周溝内表土		やや不良		
68	۰	口縁部2/3欠損 胴部1/4欠損	Ⅳ区墓道内埋土~ 埋土上部	11.6×14.8	良	_	_	99	甕	胴部破片 4×3cmの 胴部破片	I~IV区周溝內埋土~ 埋土上部	_	良	_	_
69	璲	口縁部1/4	Ⅳ墓道内埋土~ 埋土上部	(12.6) × —	良	_	_	100	甕	4×4cmの 胴部破片	II区墳丘斜面表土	_	やや不良	_	_
70	曃	口縁部~頸部 にかけて1/8	Ⅳ 区墓:道门:表土. 「区境丘科面B群、填丘場都C群 所填丘場都埋土~埋土上部 周溝内水面上。1・所区墓道内装土	(10.2)×—	普通	_	-	土	師器	147860001		L		1	
71	璲	2×2cmの 口縁部破片	I~Ⅳ区周溝内埋土~ 埋土上部	_	普通	_	_	101	杯蓋	口縁部~底部 にかけて1/2 (口縁部は1/7)	トレンチ、墓道内埋土~ 埋土上部 II・II区玄室内埋土~埋土上器	(13.6) ×—	やや不良	_	-
72	璲	頸部1/4	I 区境丘端部埋土~埋土上部 Ⅳ 区境丘斜面埋土~埋土上部	_	良好	_	-	102	杯蓋	口縁部1/4	I 区玄室内埋土~ 埋土上部	(12.8) ×—	普通	_	–
73	壺	口縁部~胴部 にかけて1/4	Ⅳ区周溝内埋土中	(11.8)×-	普通	_		103	杯蓋	2×3cmの 口縁部破片	Ⅳ区玄室内床面上	_	不良		_
74	・ 壺 (短頭壺)	口縁部2/3 欠損	驀道内	6.8×5.8	良	外〇	静止	104	杯身	全体2/3 (口縁部1/4)	Ⅱ・Ⅲ区幕道内 カクラン	(13.2) × (5.1)	良	_	-
75	壺	胸部~頸部 1/3	N区玄関内床面上、トレンチ 薬道内埋土~埋土上部	(17.8)×-	良	_		105	杯身	全体1/2	トレンチ	(13.0) × (5.0)	やや不良		-
76	壺	口練部-頸部 1/5	I区周溝内埋土中	(9.3) ×—	普通	_	-	106	杯身	全体1/2 (口縁部1/4)	トレンチ	(13.1) × (4.7)	やや不良	-	_
77	壺	2×3cmの 口縁部破片	I 区前庭部埋土~ 埋土上部	(8.4) ×—	良	-		107	杯身	口縁部1/3	墓道内カクラン、 Ⅰ区玄室内床面上 Ⅲ区玄室内床面上	11.4×-	やや不良	_	-
78	壺	口縁部1/5	IV区周溝内表土	(11.4)×-	普通		-	108	杯身	全体1/6	1区支室内床面上、V区墓道内床面 上、支室内床面上 1~V区周溝内埋土~埋土上系、	(11.8) × (4.8)	やや不良		右
79	壺	6.5×5cmの 頸部下~肩部破片	I 区墓道内埋土~ 埋土上部		良	-		109	杯身	口縁部1/4、 底部1/3	- 豪道内カクラン トレンチ、驀道内床面上	13.4×8.6	不良	-	-
80	壺	口縁部~頸部 1/2	I 区墳丘斜面B群 .	(12.8) ×—	良		-	110	杯身	口縁部1/9	墓道内埋土~ 埋土上部	(12.4)×-	やや不良		-
81	横瓶	底部~胴部 にかけて1/4	I区周溝内黑色土中	_	良		_	111	杯身	胴部1/8	I 区境丘端部埋土~ 埋土上部		やや不良	-	-
82	横瓶	開部下位~底部 にかけて1/4	1 区域丘場部埋土~埋土上部 周端 内埋土~埋土上部 N区周浦内床面上 1~育区町浦内埋土~埋土上部 支室内埋土~埋土上部	_	良	-	-	112	杯身	底部1/3		_	やや不良	-	-
83	甕	口縁部~肩部 にかけて1/4	1区域充終面B群 整道内埋土~埋土上部 前庭部埋土~埋土上部 前庭部埋土~埋土上部 債 丘端部埋土中 間溝内カクラン、間溝 内黒色土中 R区域丘端部埋土~埋	28.6×-	良	-	_	113	杯身	2.5×3cmの 口縁部破片 (た北日野歌次術)	I・Ⅳ区尚溝内床而上?	_	不良		-
84	甕	口縁部~肩部	土上部、駅議内服色土中 間議内カク ラン、既課内床面上、玄宝内採面上 IV区周溝内埋土中、	23.2×-	良	_		114	1111	口縁部~底部 にかけて1/7	Ⅲ区玄室内床面上	(12.2) × (3.0)	やや不良	-	-
85		にかけて1/3 口縁部~頭部1/10	周溝内床面上 Ⅱ区墳丘斜面	20.2 ^ _	良良			115	Ш	底部1/2	田区玄室内床面上	-	普通	-	-
	壺雍	(ただし口唇部は欠損) 5×5cmの	Ⅳ区墓道内埋土~			th C		116	高杯	口縁部1/2欠損 脚部1/4欠損	Ⅳ区墓道内埋土~ 埋土上部	18.0×14.6	不良	-	-
86  87	甕	口縁部破片 5×5cmの	埋土上部 I~Ⅳ区周溝內埋土~		やや不良	91C		117	弥生土器	底部残存	表採	-	不良	-	
88	· 瓷	口縁部破片 3.5×5cmの 口縁部破片	埋土上部   IV区墳丘端部埋土~   埋土上部	_	やや不良	Į —		118	土鈴	全体1/2	I ~Ⅳ区周溝内埋土~ 埋土上部	_	不良	-	-

# 図版



### 図版2



1、タカバン塚古墳遠景(南から)



2、タカバン塚古墳近景(南西から)

## 図版3





2、石室墓壙(南から)

1、石室全景(南西から)



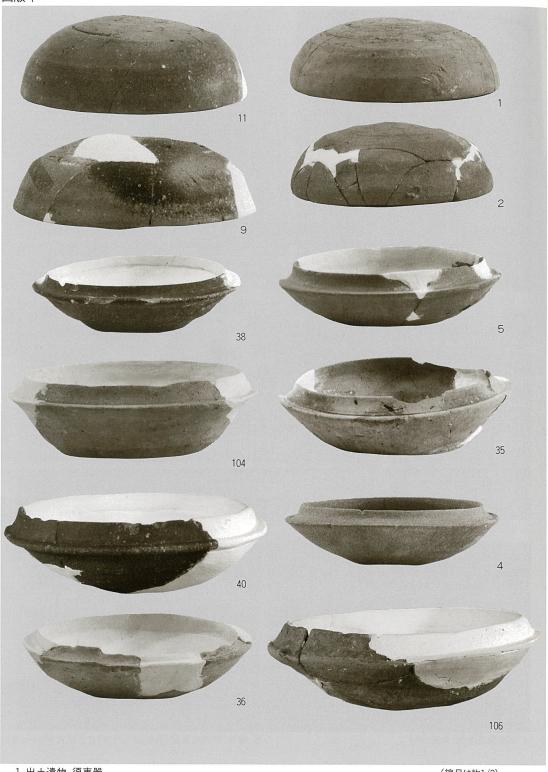
3、墳丘土層断面(東から)



4、閉塞関連遺構(北東から)



5、遺物C群検出状態(北から)



1、出土遺物、須恵器



1、出土遺物、須恵器、土師器

(縮尺は甕を除いて約1/3)



1、出土遺物、武器類他

# 6、まとめ

タカバン塚古墳について調査報告を示したが、ここでは若干のまとめをおこないたい。

本古墳は墳丘や石室に相当の破壊があり、遺存状態は悪かった。周溝は全周を巡る可能性がある。墳丘は約19×16mの楕円形で、高さ約3.8mの二段築成と復元された。墳丘一段目を切り込み、南西に開口する単室両袖の横穴式石室が内部主体である。墓道は1回の大きな掘り替えがあり、それぞれ最低2回の埋葬行為が推定された。墓道及び開口部周辺から多くの遺物が出土した。供献品としては須恵器、土師器、土製品、石製品がある。墳丘内への一括埋置や斜面への破砕散布がある。須恵器には他地域から搬入されたと推定される内面にへラ記号をもつ例もある。須恵器は4時期に区分され、出土状態から2期(TK43期)が一次墓道の下部、3期(TK209期)が二次墓道の下部に対応する。また、1期(TK10~43期)の存在から初葬はこの時期になると見られた。4期(TK217期)は遺物が少なく、埋葬行為に関係するか不明である。本古墳は6世紀中葉に築造、初葬され、7世紀初頭まで使用されたと見られる。

副葬品は石室付近から出土し、攪乱や盗掘から免れた僅かなものである。武器、武具、馬具、工具、装身具を確認し、その中には注目すべきものがあった。武器類は鉄刀、鉄鏃、弓金具、武具類は靱金具などがある。副葬時期が特定できず、また、組成も明らかにできないが、鋲飾りの弓と靱、さらに一括の長頸鏃群は共伴する可能性が高い。これらは3期以前に副葬されたと見られる。馬具は二群の存在が推定され、須恵器でみた1、2期と3期にそれぞれ対応する。

田中新史氏や本報告書での宮代栄一氏によると、鋲飾りの弓や靱はそれぞれ規格性があり、中央政権により各地の有力者層に配布された可能性が指摘されている。田中氏は一歩踏み込んで「中央との直接的な関係を示すことのみで完結性を持つような性格」として「舎人」や「靱負層」をあげている。この地域の古墳被葬者の性格や、集団の構成を追求する上で注目しておきたい見解である。

タカバン塚古墳の調査成果の一部を示したが、紙数の関係と事実記載を重視したために、十分な考察を加えることができなかった。これについては何れ、なんらかの機会を設けその責を はたしたいと思う。

参考文献 田中新史1979「古墳出土の飾り弓」『伊知波良』 1 (pp9-30)

福岡市埋蔵文化財調查報告書第335集

## タカバン塚古墳

1993年3月31日

発 行:福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷:秀巧社印刷株式会社

福岡市南区向野2丁目13-29

